

<抄録>18. 歯周治療学臨床実習における相互実習の学習効果

著者名(日)	池田 雅美, 森 真理, 室 三之, 吉田 拓司, 加藤 幸紀, 富岡 純, 小林 孝雄, 有路 博彦, 望月 研司, 藤原 純, 伊藤 泰城, 山崎 厚, 村杉 典彦, 中島 啓介, 小鷲 悠典
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	21
号	1
ページ	185
発行年	2002-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00008723/

さらに、平成2年8月には、社会福祉法人緑星の里内に歯科診療室を設置した。このように本学においては、福祉施設等を通じた地域社会への貢献も積極的に展開してきた。

以上のごとく、地域支援医療科の担うべき活動は多岐にわたるが、今回は、訪問歯科診療と災害地歯科診療に関する活動報告を行う。

18. 歯周治療学臨床実習における相互実習の学習効果

○池田 雅美, 森 真理, 室 三之, 吉田 拓司, 加藤 幸紀, 富岡 純, 小林 孝雄,
有路 博彦, 望月 研司, 藤原 純, 伊藤 泰城, 山崎 厚, 杉村 典彦, 中島 啓介, 小鷲 悠典
(北海道医療大学歯学部歯科保存学第1講座)

【目的】 学生がプラークコントロールの重要性を理解するためには、歯周基本治療による歯肉の改善を観察することが有効である。本研究の目的は歯学部臨床実習において互いに口腔清掃指導を行う相互実習の学習効果について検討することである。

【方法】 北海道医療大学歯学部臨床実習生85名か2人1組でお互いに術者と患者になり、Loe & Silnessの歯肉炎症指数(GI)、ポケット深さ、Millerの歯の動揺度の診査、O'learyと川崎式のプラーク付着指数の診査を行った。治療計画を立案後GIが0になることを目標に学生が口腔清掃指導を行い、インストラクターがその補足を行った。目標達成後スケーリングを行い、その後再評価を行った。また、実習終了後には毎回学生とインストラクターでブラッシングに関するディスカッションを行った。85名全員に対して行ったアンケートに基づいて学習効果を判定した。

【結果および考察】 2～6回のブラッシング指導でO'

LearyのPCRは $54.7 \pm 24.3\%$ から $11.6 \pm 10.0\%$ 、川崎式歯垢指数は $31.3 \pm 16.0\%$ から $5.4 \pm 5.2\%$ と減少した。GIは初診時 1.27 ± 0.63 から 0.07 ± 0.10 と改善した。アンケートの結果から、プラークコントロールの重要性について基礎実習時よりもよく理解できたと回答した学生が多いことが明らかとなった。そしてブラッシング指導が難しかった部位とGI値の下がりにくい部位を再認識することができた。また、学生同志でもモチベーションを得ることが難しかったので外来患者に対する指導に不安を感じるとの回答も認められた。しかし、大部分の学生が将来歯科医師になった時にこの体験を生かして患者さんに口腔清掃指導を行いたいと回答していた。

以上の結果から、プラークコントロールの重要性を相互実習で学習するのは有効であると考えられた。今後は、外来患者の口腔清掃指導などの実践的な実習の効果について検討する予定である。

19. 臨床実習における形成的評価の検討 ～個人内評価表を導入して～

○岡橋 智恵, 大山 静江, 長田 真美, 沢辺千恵子, 小田島千郁子, 五十嵐清治
(北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校)

【目的】 本校では、学生を継続的に捉える形成的評価として学習過程を重視する評価観に基づき個人内評価表を作成し導入している。

今回は、形成的評価として導入した、個人内評価が学習の動機付けとしての機能を果たしているかについて検討したので報告する。

【方法】 方法は指導者が記入した評価集計と学生のアンケート調査の双方向で分析した。対象は平成11年度と12年度の第2学年、93名である。

【結果】

・実習全般の指導者側の評価視点は知識の獲得や技術の向上による学生個人の力量の形成や提出物などを重視しており、学習態度の項目では学習意欲・規律・礼節についてが多く、患者援助の項目ではほとんど評価されないという偏りが見られた。

・学生のアンケート調査の結果

①「到達レベルの確認と次回実習への手がかり」について、努力した59%、どちらでもない25%、思わない10%であった。

②「やる気」について、やる気につながった76%、どち